

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター 所長

平成 2 3 年度病害虫発生予報第 1 1 号について

平成 2 3 年度病害虫発生予報第 1 1 号を発表したので送付します。

平成 2 3 年度病害虫発生予報第 1 1 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	1 いもち病（苗いもち）	-	2
	2 スクミリングガイ	やや少	2
施設野菜全般	1 病害全般	-	2
冬春きゅうり	1 うどんこ病	やや少	2
	2 べと病	やや少	3
	3 灰色かび病	並	3
	4 褐斑病	やや多	3
	5 黄化えそ病	-	3
	6 ミナミキイロアザミウマ	並	4
	7 タバココナジラミ類	並	4
	8 病害虫全般	-	4
冬春ピーマン	1 うどんこ病	並	5
	2 斑点病	やや多	5
	3 黒枯病	前年、前々年と同程度	5
	4 アザミウマ類	並	5
	5 タバココナジラミ類	前年より多い	6
冬春トマト	1 葉かび病	並	6
	2 灰色かび病	多	6
	3 タバココナジラミ類	並	6
	4 トマト黄化葉巻病（TYLCV）	前年と同程度	6
冬春いちご	1 うどんこ病	やや少	6
	2 灰色かび病	やや多	7
	3 ハダニ類	並	7
	4 アブラムシ類	やや少	7
	5 オンシツコナジラミ	-	7
カンキツ	1 そうか病	並	8
	2 かいよう病	並	8
	3 ミカンハダニ	やや多	8
茶	1 カンザワハダニ	並	8

は注意報を発表中

作物の生育状況（2月中旬）

冬春きゅうりの促成栽培は収穫期、半促成栽培は定植期、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春いちごは収穫期であった。

向こう 1 か月の気象予報

天気は平年より曇りや雨の日が多く、気温は平年並または高い確率ともに40%、降水量は多い確率50%、日照時間は少ない確率50%と予想されている。

（1 か月予報 鹿児島地方気象台 2 月 2 4 日発表）

発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1. いもち病（苗いもち）

[防除上の注意]

(1) 育苗時に発生がなくても本田で早期に発生するおそれがあるので、移植時の箱施肥を徹底する。

2. スクミリンゴガイ（やや少）

[予報の根拠]

(1) 2月上旬の未耕起水田（宮崎市、新富町）での m^2 当たり総貝数3.1頭（平成6.2頭）は平成よりやや少、生貝率3.2%（平成47.1%）は平成より少である。

(2) 用水路での m^2 当り総貝数30.8頭（平成39.3頭）は平成並、生貝率36.0%（平成56.2%）は平成よりやや少である。

[防除上の注意]

(1) 水田に生息する貝は、耕耘により破碎し防除する。この場合、土壌は硬いほど、耕耘ピッチは小さいほど、貝は大きいほど殺貝効果が高い。耕耘する深さによる殺貝効果はあまり違いがなく、貝が主に越冬生息している土壌表層部を細かく耕耘することで殺貝効果が高まる。

(2) 用排水路からの侵入を防ぐため、水の出入り口にネットを設置する。

(3) 田植後2～3週間は、できるだけ水深1cm以下の浅水管理とする。

(4) 貝の生息量が多い場合には、薬剤の育苗箱施用と本田施用を実施する。

施設野菜全般

1 病害全般

(1) 1か月予報によると、天気は平成より曇りや雨の日が多く、気温は平成並または高い確率ともに40%、降水量は多い確率50%、日照時間は少ない確率50%と予想されており、各種病害の発生に好適な条件となるため、気候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。

(2) 多発してからでは防除効果が劣るので、初期防除を徹底する。特にコスト低減のため多層被覆にしているところでは、換気が悪く病害の発生が助長される傾向があるので注意する。

(3) 今後は夜温も高めに推移することから、加温機が稼働しない日は施設内が多湿になり、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意が必要である。

(4) 生育初期である10～11月に曇天が多かったことから根の張りが悪く、今後の着果負担に伴い草勢低下が予想され、病害が発生しやすい条件下にあるため、草勢の維持管理に努める。

(5) トマトの灰色かび病について注意報を発表しているが、トマト以外の作目についても多発しやすい状況であるので注意する。

きゅうり：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病、褐斑病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病、軟腐病など

トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

冬春きゅうり

1 うどんこ病（やや少）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率30.0% (平年51.5%) は平年よりやや少、発病葉率2.8% (平年7.4%) は平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
- (2) 耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (3) 乾燥時に発生が多くなるので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。
- (4) 半促成栽培でも急速に病勢が進展することがあるので、促成栽培と同様の注意が必要である。

2 ベと病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率50.0% (平年73.2%) は平年よりやや少、発病葉率6.3% (平年15.7%) は平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすく、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- (2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

3 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率5.0% (平年9.1%) は平年よりやや少、発病果率0.8% (平年0.3%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- (2) 花卉等の発病に注意し、予防及び発病初期の防除を徹底する。
- (3) 耐性菌が発生しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4 褐斑病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率50.0% (平年47.4%)、発病葉率9.7% (平年8.8%) はいずれも平年並である。
- (2) 天気は平年より曇りや雨の日が多く、気温は平年並または高い確率ともに40%、降水量は多い確率50%、日照時間は少ない確率50%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- (2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し過繁茂になって通風を妨げるが、逆に少ない場合は草勢低下を招き好ましくないので、適正な肥培管理に努める。
- (3) うどんこ病、ベと病の発生後には激発することがあるので、両病害の防除を徹底する。
- (4) 摘除した発病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

5 黄化えそ病 (MYSV)

平成23年度病害虫防除情報第10号 (12月16日発表)

[防除上の注意]

- (1) 2月の巡回調査における発生面積率は5.0%、発病株率は0.1%であり、今後感染の拡大が懸念されるため嚴重な警戒が必要である。

- (2) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬されるため、発生後は急激に圃場内外に蔓延する恐れがある。ミナミキイロアザミウマの防除対策については、次項を参照のこと。
- (3) 感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニル袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理する。
- (4) 本病と疑われる症状が発生した場合は、西臼杵支庁・農林振興局（農業改良普及センター）または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡する。
- (5) 改植時には、後述「8 病害虫全般（改植時の留意点）」を参照のこと。

6 ミナミキイロアザミウマ（並）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率5.0%（平成9.7%）は平成よりやや少、葉当り虫数0.4頭（平成0.4頭）は平成よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。
- (2) 施設内では、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので最少でも7日間隔で3回の連続防除を行い、多発しているときは更に連続した防除を徹底する。

7 タバココナジラミ類（ハイトイフ[°]B(シハ[°]-リ-フナヅ[°]ラミ)、ハイトイフ[°]Q）（並）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率40.0%（平成37.8%）、100葉当たり虫数9.1頭（平成8.0頭）はいずれも平成並である。

[防除上の注意]

- (1) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- (2) 効果のある殺虫剤が少ないことから発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- (3) 施設内外の雑草は、タバココナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- (4) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一系統薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬やコナジラミ類を物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。

8 病害虫全般（改植時の留意点）

[防除上の注意]

- (1) ウイルス病を媒介するタバココナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、以下のことに留意し、次作の発生源を絶つように努める。
 - 前作きゅうりの栽培を終了する前に、殺虫剤を7日間隔で3回散布する。
 - 栽培を終えたら、ハウス内の除草を徹底するとともにきゅうりを完全に抜根する。
 - 抜根後20日間以上蒸し込む。
 - 蒸し込み期間中は、有色粘着板を設置し成虫を捕殺する。
 - 後作きゅうりの定植時には、必ず粒剤を施用する。
- (2) 前作に褐斑病などの発生があった場合には特に注意し、定植後直ちに予防防除し感染を防ぐ。
- (3) 苗の購入の際は、病害虫の発生状況を十分確認する。特にミナミキイロアザミウマが寄生していたり被害痕が多い苗は避けるとともに、ウイルス病の発生が疑われるときは直ちに株を破棄する。
 - また、農薬の散布履歴を確認し、育苗期に粒剤の使用がない場合は直ちに施用する。

冬春ピーマン

1 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の発生面積率42.8% (平年57.3%) は平年よりやや少、発病葉率9.6% (平年7.0%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないように適正な水管理に努める。
- (2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
- (3) 上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、2回以上の防除を実施する。
- (4) 微生物農薬は予防的効果が主であり、定期的に化学農薬も併用する。

2 斑点病 (やや多)

(1) 2月中旬の発生面積率28.6% (平年26.8%) は平年並、発病葉率8.9% (平年1.9%) は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- (2) 病原菌が植物体に侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

3 黒枯病 (前年、前々年と同程度)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬における巡回調査では発生を認めていない。

(発生面積率：前年0.0%、前々年0.0%、発病葉率：前年0.0%、前々年0.0%)

[防除上の注意]

- (1) ほ場内が多湿条件にならないように、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- (2) 被害茎葉、果実は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処理する。

4 アザミウマ類 (並)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬におけるミナミキイロアザミウマの発生面積率21.4% (平年30.1%) は平年よりやや少、10花当り寄生虫数0.6頭 (平年1.0頭) は平年並である。

(2) ヒラズハナアザミウマの発生面積率21.3% (平年21.9%) は平年並、10花当り寄生虫数4.2頭 (平年4.1頭) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) ミナミキイロアザミウマの成虫が10花当たり1頭程度寄生すると、販売等級格下げとなる果実が5%発生するので、発見したら早めに防除する。
- (2) ヒラズハナアザミウマは、生息密度が高まると被害が発生するので注意が必要である。
- (3) 今後、気温の上昇とともに例年増加していく時期であるので注意する。
- (4) 施設内では、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので最少でも7日間隔で3回の連続防除を行い、多発しているときは更に連続した防除を徹底する。
- (5) 両アザミウマの薬剤感受性は異なるので、防除の際は使用する農薬に留意する。
- (6) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (7) 被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出し、マルチ被覆、有色粘着板の設

置により生息密度の低下を図る。

5 タバココナジラミ類(ハ'イタイフ°B(シハ'ーリ-フコナジ'ラミ)、ハ'イタイフ°Q)(前年より多い)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の発生面積率7.1%(前年0.0%、前々年6.7%)、100葉当たり虫数0.4頭(前年0.0頭、前々年0.1頭)はいずれも前年より多い。

[防除上の注意]

(1) 冬春きゅうりのタバココナジラミ類(4ページ)を参照のこと。

冬春トマト

1 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の発生面積率16.6%(平年15.5%)、発病葉率2.6%(平年2.5%)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

(1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。

(2) 発病初期の防除を徹底する。

2 灰色かび病 (多)

平成23年度病害虫発生予察注意報第5号(2月27日発表)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の茎葉での発生面積率58.4%(平年29.4%)、発病株率15.6%(平年1.8%)はいずれも平年より多である。

(2) 果実での発生面積率25.0%(平年10.9%)は平年より多、発病果率1.0%(平年0.5%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

(1) 低温多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。

(2) 花卉の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 タバココナジラミ類(ハ'イタイフ°B(シハ'ーリ-フコナジ'ラミ)、ハ'イタイフ°Q)(並)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の発生面積率33.3%(平年36.5%)、100葉当たり虫数1.1頭(平年2.8頭)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

(1) 冬春きゅうりのタバココナジラミ類(4ページ)を参照のこと。

4 トマト黄化葉巻病(TYLCV)(前年と同程度)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査では、発生を確認していない。

(発生面積率:前年0.0%、前々年7.7%、発病葉率:前年0.0%、前々年0.2%)

[防除上の注意]

(1) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き去り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

(2) タバココナジラミ類(媒介虫)の防除を徹底する。

冬春いちご

1 うどんこ病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の葉での発生面積率25.0% (平年35.8%) は平年並、発病葉率0.7% (平年3.4%) は平年より少である。
- (2) 果実では12ほ場のうち3ほ場で微発生^(注) (発病果率0.5%未満) が確認されている。(平年値 : 発生面積率12.0%、発病果率 : 0.6%)

[防除上の注意]

- (1) 葉裏に発生しやすいので、早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- (2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くする。
- (3) 発病果など被害部は伝染源になるので、早めに除去しほ場内に放置しない。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

2 灰色かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率8.3% (平年8.4%) は平年並、発病果率1.8% (平年0.3%) は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので換気に努めると同時に、薬剤散布、灌水にあたっては施設内の空気湿度を高めないように留意する。
- (2) 病果や病葉は早めに摘除して、ほ場内に放置しない。
- (3) 薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

3 ハダニ類 (並)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率50.0% (平年58.4%)、寄生株率11.3% (平年14.8%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- (2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

4 アブラムシ類 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率8.3% (平年28.5%) は平年より少、寄生株率2.3% (平年3.2%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- (2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

5 オンシツコナジラミ

[防除上の注意]

- (1) 地域により薬剤感受性が低いオンシツコナジラミが確認されているので、地区の普及指導員や技術員の情報を参考にして防除に努める。
- (2) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

カンキツ

1 そうか病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査では、発生未確認である。
(平年値：発生面積率1.5%、発病葉率0.1%)

[防除上の注意]

- (1) 越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
(2) 春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、発芽初期の防除は必ず行う。

2 かいよう病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の越冬葉調査での発生面積率16.7% (平年20.3%)、発病葉率1.0% (平年2.4%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
(2) 防除は予防散布が原則である。

3 ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率55.6% (平年45.7%) は平年より多、寄生葉率9.2% (平年10.2%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 越冬密度の高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季 (3月上～中旬) にマシン油乳剤による防除を行う。

茶

1 カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の摘採面での発生面積率23.1% (平年40.4%) は平年よりやや少、寄生葉率0.6% (平年2.5%) は平年より少である。
(2) 茶樹すそ部での発生面積率76.9% (平年65.9%)、寄生葉率5.5% (平年8.4%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期 (2月下～3月中旬) で、すそ部の葉裏に多く生息しているので、十分な薬液が到達するように丁寧に散布する。

(注) 微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>
農林水産消費安全技術センターホームページ
<http://www.acis.famic.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
- 3 発生量（程度）の区分
多 い （高 い） やや多いの外側 10%の度数の入る幅
やや多い （やや高い） 平年並の外側 20%の度数の入る幅
平年並 平年値を中心として 40%の度数の入る幅
やや少ない （やや低い） 平年並の外側 20%の度数の入る幅
少ない （低 い） やや少ないの外側 10%の度数の入る幅
(平年値は過去 10 年間の平均)
- 4 予察情報の種類
病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の 5 つです。
(1) 予報・・・向こう 1 か月の発生状況を予測し、毎月 25 日前後に発表する。
(2) 注意報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
(3) 警報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
(4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
(5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。
ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

病害虫防除・肥料検査センター 生頼
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127
E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp